

リヤカーの行商人を追いかけて見えてきた小倉の街

藤田 義之

北九州大学文学部人間関係学科

要旨

本論文では小倉の中でふと見かけた、40年以上もの長い間物売り歩いている行商のおじさんについて述べている。まず第一章では彼を最初に見かけたときのことから始まり、実際に会って聞いた話を元に商売のやり方・商売を始めたきっかけ等を簡潔に述べた。

次の第二章においては、彼と共に小倉の街を歩いて廻り、見聞きしたことをそのまま私の視点で述べた。この章から私の覗いた世界を少しでも感じ取ってもらえることがねらいである。

そして最後の第三章であるが、ここでは約半年間という期間の中、彼から聞いたこと、そして一緒に廻ったという経験をふまえてわたしなりに分ったこと・気づいたことを述べている。

目次

第一章 街で見かけた「リヤカーおじさん」

第二章 共に歩いた日の記録

・第一日目

・第二日目

・第三日目

・第四日目

・第五日目

第三章 この六ヶ月間を振り返って

なお、資料の地図は『北九州グランドまちず・福岡人文社』を使用しました

第一章 街で見かけた「リヤカーおじさん」

平成10年5月の中ごろのこと。小倉北区平松町のあたりで、私は「リヤカーになにやらたくさん物を積んで引いて歩いているおじさん」を目

にする。ゆっくりと目の前を歩いていくその姿は、私の目にかなり「特異」に映った。こうして物売り歩く人は今までほとんど見かけたこともなかったからだ。あとできいたところによると、彼は少なくとも30年間ずっとそうして売り歩いてい

るといふ。昔と違い、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなど数多くの店という店が建ち並ぶ現代において、彼の商売はどのようになされ、成り立っているのだろうか。そして彼を長く歩き続かせているものは一体なんだろうか。そのような疑問を抱いた私は早速彼に会って、彼に話を聞いてみることにした。しかし、ただ「会う」と一言で言っても一ヶ所にとどまっているわけではないので、すぐに会うことはできなかったが、それでも何とか彼を探し出し、話を聞くことができた。以下では聞いた話を元に彼のことを詳しく述べていくことにする。

名前は中河原勝樹といい、年齢は72歳（平成10年5月現在）、北九州市戸畑区にて妻と二人で暮らしている。子供は男2人、女2人の4人で、みな家庭を持っている。そして孫はそれぞれの子供に2人ずつ全部で8人になる。

次にそんな中川原氏の商売についてであるが、氏は日曜・祝日を除いてほぼ出かけており、出かける当日は仕入れや準備をしたあと、昼頃には出発する。

主なルートとしては戸畑区の自宅から出発し、平松町までくると、鑄物師町から大門、室町、京町そしてたまに鍛冶町や紺屋町まで出向き、帰りはほぼ逆にたどっていく。戸畑区や八幡区のあたりを廻ることもあるが基本的には小倉周辺を廻るこのルートを歩く。このように歩く道筋はおおよそ決まっているのだが、一日単位で見えていくと日によって多少違ってくる。氏はどこどこは何々の品物がそろそろ必要になる頃だろう、ということをお願いしているらしく、そういったことを考慮に入れた上でその日のルートが決まっていく。よって毎日が全く同じルートになるわけではないのだ。

「何かいらんですかー？」

目的の家、あるいは店の前にたどり着くと、まず

こう声をかけて聞いてみる。そして必要なものがあるならば、リヤカーからそれを取りだし、頭の中で値段を計算し、その金額を言い、買ってもらう。お客さんのほうが呼び止めて買って行くこともあるが、基本的にはこうした流れで売り買いがなされていく。

服装は動きやすい服に、腰には前掛け、そして八百円くらいの靴を履く。靴は三ヶ月もするとくたびれてしまうので、そうした安い値段の物を買うのだそうだ。そして夏は麦藁帽子をかぶり、冬にはジャンパーを上に着るが、一年を通して服装にこれといった大きな変化はみられない。

こうした具合に小倉の街で今もお売り歩く中川原氏であるが、この商売を始めるにいたった経緯はどのようなものであろうか。次はこのことについて述べていくことにする。

中川原氏は15歳の頃すでに働いていたのだが、当時は戦争真っ只中だったため小倉造兵所という軍事工場で戦車の部品や飛行機の部品を作る仕事をしていた。そうした仕事を20歳の頃まで続けた後、約1年大分に疎開するが、やがて戦争は終わる。それから25歳くらいの時のこと、父親のやっていたリヤカー引きの仕事を自分もやってみることにした。それが元々のきっかけである。それから40年以上経った今でも、ほとんど変わらぬ姿でリヤカーを引きつづけてきた。しかし、そんな氏とは反対に周囲は様々に変化していった。まず始めた当時は7～8人の同業者がいたが、タクシーの運転手や植木屋などへ鞍替えしていき、今ではただ中河原氏1人だけとなった。また、街の風景も大きく変わっていった。田や畑でいっぱいだった中井・戸畑のあたりは、のちに埋め立てられ多くの家々が建てられていき、旧小倉駅のあたりには今の西小倉駅ができ、今の室町大橋付近の川沿いにはいえがびっしりと並んでいたが、今はその影すらなくなってしまった。

だが、変わらない物も少なくない。中川原氏の売り歩く姿をはじめ、相棒であるリヤカー、昔からの常連のお客さん、そして仕入れ先もそうである。特に仕入れ先とのつき合いは氏の父親の代から受け継がれ、現在まで続いている。たとえばざしきぼうきは熊本から取り寄せ、竹かごは八女市という所から。他にも黒崎、そして戸畑にも2軒の仕入れ先があり、ずっと変わっていない。リヤカーにしてもそうだ。タイヤを1年に1回ほど取り替えるほかは車体をごくごくまれに修理に出すくらいで、買い替えたりはしていない。ずっとずっと中川原氏とともに小倉の街を歩いてきたのである。

これまで中川原氏とその商売について、ざっと紹介してきたがこれはほとんど全て、私が氏からインタビューのような形で聞いたものをまとめたものに過ぎない。氏は実際にどのような道をどう歩き、どんなお客さんたちと出会っているのだろう。話を聞いただけでは分からない一風変わった世界を私も覗いてみたくなった。そこで私は思いきって、氏に

「一緒について廻らせてほしい」

と頼んでみた。結果、私の願いはかない、共に廻るその日は「6月25日」に決定する。最終的には6月から11月にかけて計5回その機会をもつことができたのだが、次からはその第1日目から第5日目までの実際に歩いて廻った記録を書いていくことにしたい。

第二章 共に歩いた記録

<第1日目>

6月25日木曜日。天気は曇り。今日は中川原氏と一緒に歩いて廻る最初の日である。正午に氏の自宅にて待ちあわせをして、いざ出発である。

戸畑の家を出てからは小芝・中原西と道路に沿ってひたすら歩く。車道の上をゆっくりゆっくり

と進む。

「売れる日は20件くらい売れる。」

そんなことを二言・三言はなしてくれながら、境川2丁目へやってくる。「境川2丁目13-16」にリヤカーが止まる。時間は12時15分ごろ。今日の最初のお客さんである、60代の女性が家から出てきて、クレンザーやオレンジ色の紙袋に包まれた亀の子たわし、そして二千三百円の底の浅い竹かご—これは後で二百円プラスしてもう少し大きなサイズのかごに交換するのだが—を購入する。しばらく彼女は中川原氏と話していたが、ふと私のほうを見て不審げな顔をする。この時私はといえば帽子をかぶり、首にタオルをかけ、コピーした地図と黒い手帳を手にボールペンでなにやら書き込んでいた。不審がられるのも無理はないかもしれない。そこで彼女に事情を話そうとしたところ、中川原氏のほうが先に説明してくれた。やがて不審の色が解けるや否や彼女は

「ずっと長いこと続けているのよ。感心するわ。」とか、

「モノ（商品）がいいからいいよー」

などと教えてくれた。そんな話の中川原氏も加わりしばらく話が続く。やがてここを去ろうというとき、彼女は2人分の缶コーラを手渡してくれたのだった。

そして4人のお客さんがほぼ立て続けに買っていった後、「境川2丁目10-3」に止まる。眼鏡をかけた歳くらいの女性が子犬を抱えながら家を出てくるが、

「いるもんじゃないねー」

とリヤカーのなかを覗き込みながら言い、結局このときは買ってもらえなかった。だが、少し歩いた後追いかけてきて、ほうきを購入していった。

やがて「境川2丁目8」を過ぎた後、50代の女性がほうきを買いに来る。四百円のほうきを一万円札で買おうとしたが、中川原氏の手元には細か

いおつりがない。それで彼女はどこやらへと両替をしに行ってくれることになった。

ところが彼女は一向に戻ってくる様子がない。中川原氏に言わせればいつものことらしく、行った先で話し込んでいるのだろうということだ。「それでも文句はいえん。お客さんじゃけ」氏がそう言ってしばらくした後、彼女はようやく帰ってくる。さて、再び出発である。

13時ごろ、中井3丁目の『錦うどん』で昼食を取った後、日明・高峰・緑ヶ丘と歩いていく。そして「高峰町10-40」のあたりに来た14時4分ごろ、パン・菓子商店の前で50代の女性が割り箸セットを買いに来る。自分が何をしているのか彼女に言うと、彼女は妙に納得した様子で、「それなら何度も何度も、それこそ何十回くらい一緒に廻らんと。少しじゃつまらんのよ」と言った。私はその言葉にうなずくしかなかった。

それから再び緑ヶ丘を廻り、平松町、そして「鋳物師-7」付近の公園にやってくる。ここで休憩だ。中川原氏はこのすぐ近くの酒屋で缶ビールを買い、私には缶ジュースをおごってくれた。本当は「ビール飲まんか」と言ってくれたのだが、私はビールが苦手だと言うこともあり断ってしまったのである。

休憩を終え、大門から室町へと進み、やがて京町の商店街に入る。ここからは魚町・鍛冶町と小倉駅周辺を廻るのであるが、このあたりは飲食店が多く、お客さんもそれらの店員であることが多い。

そうして何件もの家を廻り、何人もの客を相手にしながら「鍛冶町1-3-12」を通り過ぎていた、16時5分頃のこと。空からポツリ、ポツリと雨が降ってきた。このときの雨は小雨程度のものでそれほど気にする必要もなかったのだが、それから1時間後の17時5分。緑ヶ丘1丁目あたりを進んでいた頃、遠くのほうからゴロゴ

ロ・・・と雷の音を耳にする。南東の方角に雨雲を目にし、不安を感じたのもつかの間、それから2分後の17時7分。とうとう不安は現実のものとなる。ふっと思い出したかのような大雨が突然ザーっという轟音とともに降り出したのである。ちょうど目の前に誰かの車庫があったので、私たちはリヤカーともどもこの車庫にしばらくお世話になることにした。

しばらく雨の様子を2人して見ていたがいっこうに止む気配が見られない。大粒の雨が次から次へと勢いよく降ってくる。そんな雨がやや弱まってきた17時15分。リヤカーの上の品物を雨から守るために、あらかじめ用意してあったビニールシートを中川原氏はどこからともなく取り出して、リヤカー全体にかぶせるべく広げた。全てが何とか覆われた後、今度はシートの端を洗濯バサミではさんで、シートを固定していく。そんな様子に感心しながらも氏を手伝い、ようやく固定作業は終了する。

それからしばらくした17時25分。少し雲があけたのか、空は徐々にもとの明るさを取り戻してくる。やがて雨のほうも小降りになった、17時28分。いよいよ再びリヤカーの発進である。

そのあとは「仲原西3-2-3」で一人のお客さんが購入して言っただけで、18時10分には氏の自宅へと無事到着。そうして第1日目は終わる。

<第2日目>

第2日目は7月6日月曜日。天気は晴れ。雨の心配もなさそうだ。今回もまた中川原氏の自宅に行き、正午に出発した。中川原氏の今日のスタイルは、麦藁帽子に白い長袖シャツ、薄茶のズボンに黒い前掛け、そして紺色の靴である。いい天気、おまけに少し日差しが強いこともあり、私も帽子をかぶってきた。

「倒れそうになったら無理せんでいいから戻
てきなさいね」

と氏の奥さんに心配されたが、日射病にさえなら
なければおそらく大丈夫だ。このように暑い中を
6時間ほどずっと歩きつづけることはめったにな
いこともあり、少しばかり不安にかられたが、そ
れより何より20代そこそこの若者である私が倒
れるわけにはいかないのだ。

出発して数分。左に見える公園で、戸畑祇園に
そなえて太鼓打ちの練習をしている人たちの前を
通り過ぎ、中原西・中原東と歩いていく。12時
30分少し過ぎた頃、屋上にプールが見える幼稚
園の近くを歩いていたとき、中川原氏は
「月曜日は案外売れん」
とつぶやいた。実際ここに来る間は一つも売れて
いない。

それから緑ヶ丘1丁目でようやく一人の客が買
っていったあとしばらくは、ただひたすら
歩きつづけることとなる。そして日明2丁目にあ
るバス停の前までやってきたとき、60台くらい
の女性がこちらのほうにやってくる。今度家によ
って欲しい、と言っている。おそらくこの近所
の人だろう。今まで中川原氏に声をかけていく人達
はいたが、こうして頼んでくるのは初めて目にする。

平松町を通り、13時30分に鑄物師の公園に
やって来る。前回と同じこの公園で休憩である。
中川原氏は缶ビール、私は缶ジュースを手には腰を
おろす。

「はじめの頃は北方のほうまでいっとったことも
ある」

氏はそう語ってくれた。小倉北区北方は小倉駅
からでも歩いて少なくとも40分はかかる場所に
位置する。いまでも戸畑区からはるばる小倉まで
きているのに、さらに遠いところまで行っていた
のである。

13時35分、再出発。「鑄物師2丁目6付近」
の工場にやってきた。20代くらいの女性が、茶
色の毛先のデッキブラシを買っていく。中川原氏
が言うには、この工場には男兄弟5人くらいがい
っしょに働いているのだそうだ。

そして大門・室町と歩き、「室町2-8-3」で
リヤカーを止める。時間を見ると14時ちょうど。
道路をはさんですぐのところに見える『丸徳うど
ん』で昼食である。

看板に書いてあるとおり、この店にはうどんと
そばがある。この日はうどんをたのんだ。店内を
見渡すと、それほど大きい店ではないが、店の女
性店員さんは明るく、店の雰囲気も親しみやすい
感じがした。私が卒論を書くため中川原氏と一緒
に歩いていることなどを話すと、なるほどね、と
でもいいかげんな表情をみせた。

うどんを食べ終え、「ごちそうさま」と言って出
ようとしたとき、一人の店員さんが一言「頑張っ
て」と言ってくれた。中川原氏の馴染みの店にな
るのもうなずける気がする。

店を出た後は室町大橋を渡り、船頭町のソーブ
ランド(風俗店)の立ち並ぶあたりにやってくる。
一軒ごとにタキシードを着た呼び込みの人が立っ
ていて、私に時々声をかけてきた。こうした場所
でいちいち声をかけられても仕方ないので、リヤ
カーの後ろにびったりとついたまま、ここをあと
にした。その間中川原氏は今までそうして来た
ように、

「今日はいらんですかー」
と店ごとに声をかけていたが、今日は買ってくれ
るところはなかったようだ。

それからは小倉駅の北に位置する、浅野へ来る。
15時を数分過ぎた頃には、浅野2丁目のKMM
ビル前に到着していた。中川原氏は建物の中に入
っていき、戻ってきたかと思うとさいばしを取り
出し再び中へと消える。中のお客さんの注文なの

だろう。そうしてまた戻ってくる。すると氏は「西日本総合展示場の方を見よう」と誘う。階段を上り、動く歩道に乗って展示場の見える場所まで行く。特に珍しい物が見えたわけではないものの、こうした場所から少し遠くを眺めるのもなかなかおもしろい。

そんな気分転換をして、再び小倉駅の南のほうへともどる。京町・鍛冶町・魚町あたりを廻った後、室町大橋を渡り、室町に来る。室町3丁目の『旅館大吉』の前を通るとき、それを目で指して、「あの旅館はもう何十年來のお得意さんなんじや」

と言う。そのとき表情は少し誇らしげに見えた。

大門・鋳物師・平松町と再びきた道をたどると、次は日明1丁目から2丁目のほぼ線路に沿った道を通る。やがて「中井口10-20」までくると、リヤカーが止まった。時間はこの時すでに18時4分。ここでは、60歳後半くらいの女性と、50代くらいの男性の二人の人が購入する。そのうちの1人の男性のほうは、リヤカーの後ろのほうにかかっている、ブリキのちりとりを買ったのであるが、彼は

「スーパーの時代だから最近はこのものはないからねえ」

と言っていた。確かにこんな「ブリキのちりとり」はスーパーではちょっとも見かけた覚えがない。あったとしても「プラスチックのちりとり」が関の山である。そうしてリヤカーに並んでいる品物を見て、

「・・・なつかしいねえ」

ともつぶやいていた。

そして中原東・中原西、そして「沢見2-7」のお得意さんだという店の前を通り、自宅へとたどり着く。時間は当初考えていた目標時間の18時を大きくオーバーし、18時38分になっていた。そうして第2日目も終わった。

<第3日目>

第3日目は夏も終わりに近づいた、8月24日の月曜日。厳しい暑さが続き、またお互いの都合が合わず、前回から間があいてしまったが、やっとこの日に約束を取り付けることができたのである。

今日は中川原氏の希望で、私が氏を最初に見かけた場所である『奥野米穀店』で13時半に待ち合わせをすることになった。私のアパートを13時ごろ自転車で出発し、西小倉駅の自転車置場に自転車をおき目的地へとむかった。

この米穀店は西小倉駅から歩いて10分ほどの平松町にある。目的地が見え始めようか、という時中川原氏の姿を前方10メートル位のところに見つける。私は急いで氏のもとへ駆け寄っていった。

「卒論は書けとるか」

中川原氏はそう言ってにこやかに話し掛けてくれる。それに対し私は

「はあ、まあ、頑張ってます」

と返事にもならない返事をする。そんな話をしながら、なにはともあれ出発である。そうして米穀店をあとにした。

5分ほど歩くと「鋳物師4-7」付近にやってくる。いつもの休憩場所である公園だ。出発して間もないので、私にしてみれば出鼻をくじかれたようなものだが、中川原氏のほうは自宅から出発し1時間半は経過しているのだ。そこでいつものように休憩となった。

「最近の日曜はでとらん。土曜や月曜にしても買ってくれる人はあまりおらんよ」

そう中川原氏はこぼした。それから5分くらいたった、13時40分頃私たちは再び歩き始めた。

愛宕1丁目付近の立法寺や、竹箒などを1ヶ月に一回程度買ってくれるという、青葉1丁目の『北

九資源』を通り、「青葉2丁目3」にきたあたりでいったんリヤカーを止めた。いつもしているように家に向かって声をかけてみるのだが、一向に応答がかえってくる様子がない。だからここはまた今度にして、次のところに行くのかと思いきや、中川原氏はリヤカーから、竹ほうきを取り出し、そして家の玄関の前に立てかけた。不在のときはよくこうして置いていき、お金は後日寄ったときにでも貰うということだろう。

それからは豎町・田町のほうを廻る。今日はまたルートが少し違うようだ。それにこのあたりは道が比較的小さく、こまごまとしている。おかげで地図に通った道を記入していくのもやや困難である。それでもなんとか記入しながら、大門までたどり着き、室町までやってきた。

時間はすでに14時52分。少し遅くなったが、前回も来た、『丸徳うどん』で昼食である。私がここに来たのは今日でまだ二度目だが、店員さんはちゃんと覚えていてくれたようだ。

8月もあと数日、夏ももうすぐ終わりかと思われる時期ではあるが、今日もまだまだ暑い。そこで私は「涼しげな」ざるそばを注文することにした。中川原氏のほうはというと、今日もまたうどんである。氏に言わせれば、「暑いからこそ」だそう。

昼食を済ませたあとは、ソーブランドのある船頭町を通り、また浅野のほうへと向かう。一通り廻った後京町のほうへ戻り、3丁目にある『小倉教会』 - これは昔からあるそうだが - の横にリヤカーを止める。そして斜め向かいに見える『旅館つな』を指して中川原氏は「昔はよういっとったが、経営者が変わったりして、最近はほとんどいかん」と語ってくれた。

やがて鍛冶町に入り、「鍛冶町ー2-3」の『田舎庵』という食事処来たところ、20代後半くら

いの男性がチャッカマンなど数点を買って出てきた。彼はチャッカマンが二つ必要だったようだが、今日のリヤカーにはあいにく一つしか残っていなかった。中川原氏曰く、「自宅にはある」そうである。このお客さんには仕方なく一つだけ買って店の中へともどっていった。リヤカーに小さい物は亀の子たわしやスポンジ、大きい物は竹簾、ブリキのちりとりと大小様々な品物が所狭しとばかりに積んであり、いかにも何でもありそうに見えるが、こういうこともたまにはあるのだ。

魚町を通り、室町大橋をわたって常盤橋のほうまで来たとき、中川原氏はリヤカーを止めた。すぐ近くに見える河原のほうで休憩するのだそうだ。

段になったコンクリートのところに並んで腰をおろす。そこで私たちはいろいろな話をした。私の出身地である広島のことや、中川原氏の息子さん達のこと。そして次に出た話題は、あとどれくらい一緒に廻ればいいのか、というものであった。氏が言うには「できればあと二回にして欲しい」とのこと。これを聞いたとき、もしかして迷惑がられているのか、と心配になったが、そのときの氏の寂しそうな顔はそうではないことを物語った。何か言いにくい事情があるのかもしれない。私もあえてその理由は聞きはしなかった。

そうした矢先、左に見える室町大橋で誰かが橋の上から物を捨てているのを目にする。「なにをやっているのやら・・・」と私は半ばあきれただけだが、中川原氏は少し怒っている様子。私は眼鏡も何もかけていないので見えなかったが、落としたのは若い人だったらしい。「最近の若いもんは・・・」と氏はこぼす。その「若いもん」である私は一瞬どきりとした。私は中川原氏の目にどのように映っているのだろうか。そうしているうちに時刻は17時35分をさしていた。30分ほどの間ここでずっと語っていたのである。

長い休憩が終わると「室町2丁目7」では1人

がスポンジを2個買っていき、大門2丁目に来る。目の前に西小倉駅が見えた。自転車はここにおいてあるとあらかじめ言ってあったので、中川原氏がここで別れようと言い、第3日目はここで終わる。

<第4日目>

第3日目から二ヶ月ほどの間をあけた、11月4日水曜日。この日が第4日目となる。天気は曇り。念のためにかさをかばんの中に入れてある。今日も前のときと同様、平松町の『奥野米穀店』で13時半に待ち合わせをした。今度は中川原氏よりも先に来ようとやや早めに家を出て、13時15分にはもう米穀店についた。しばらくすると日明の方向から中川原氏がやってきた。実に2ヶ月ぶりである。この前とは違い、季節はもう秋から冬へと変わろうかとしている頃で、気温もだいぶ下がり寒くなってはいたが、一見したところ中川原氏の服装は麦藁帽子がなくなったくらいでたいした変りはないようだ。

久しぶりに挨拶をすると、氏はまた

「卒論は書けとるかぁ」

と聞いてくる。その言葉に対し今度は、「今、書いているところです。もうじき書き終わる・・・と思います」と答える。以前に卒論がかけたら見せて欲しいと言っていたので早く見たいのかもしれない。氏に見せるためにも早く終わらせたい。

そうして約束の時間の13時30分になった。第4日目の出発である。

出発してそれほど間もない頃、中川原氏は「今日の日曜日に公民館祭りがあって、その準備で今日は7時に家に戻らんといけん」と言ってきた。公民館祭りがどういったものかよく分からないが、そういった祭りの準備という役割も氏は担っているのだ。なかなか忙しそうだ。

やがて鋳物師のいつも休憩する公園にやってくる。止まるのかと思ったが、今日はそのまま通り過ぎた。

13時40分。「鋳物師2-31」の『新高空罐株式会社』で「いらんですかー」と声をかけた後、「鋳物師4-7」の『理容室落合』にも寄ったりして、鋳物師町を出て大門を通過、室町へと入る。13時58分に『北九州コピーサービス』という店の前に来るが、この店から50代か60代くらいの女の人がでてきた。彼女も他の人と同様に、私のほうを見ていぶかしげな顔をしたが、中川原氏と二人して事情を説明するとようやく警戒の色は消えていった。そしてやや温和な表情になると私にこう話してくれた。

「私みたいに足が悪いとこういう店が助かるのよ。スーパーだとたわし1個買うのにあちこち廻らないといけないでしょう？」

確かに言われてみればそのとおりだ。探して廻る必要も当然ないし、店までこちらからわざわざ出向く手間も要らない。これもまたこの商売の利点である。

14時10分ほどまわったとき、例によって『丸徳うどん』で昼食である。さすがに3回も来ると顔なじみのお客さん、といったふうに迎えてくれた。

「大盛りを食べれるか」

という氏の突然の言葉に思わず肯定の言葉を返す。そうして大盛りのうどんを注文してくれた。果たして食べきれののだろうか、と思ったがなんということもなくあれよあれよという間に見事平らげてしまう。思った以上にお腹がすいていたらしい。ちなみに中川原氏は普通の量のうどんを食べていた。

うどん屋を出た後、室町大橋を渡り、京町にある商店街に出る。すると右を見ても左を見てもシャッターの下りている店が多い。中川原氏によれ

ば「水曜日はこらは休みが多い」のだそうだ。

それからは、『出雲そば』、『てんぶら定食ふじしま』と食事処が続き、それぞれで何点ずつ売れた。そして魚町に入ると『豚まんのお店』では「今日はいらんですかぁ」と声をかけ、今日はいいよといわれると、次の『新薬堂』で「まだいらんですかぁ」と声をかける。しかし、ここでも今日は売れなかった。

そうして「魚町3 - 2 - 4付近」の『うどんそば喜楽』ではその店員である50代の女性、そして通りすがりの50代後半くらいの女性が購入。そのあと60代の眼鏡をかけた、気難しそうな男の人がやってきて、「木彫りしゃもじ」とかいう物が欲しい、という。普通のしゃもじではいけないのかと、リヤカーにあるしゃもじを見せるが、どうもお望みのしゃもじはないらしい。そして中川原氏が

「(そういうしゃもじは)卸屋にもないですよ」というと、その男性はぶつぶつ言いながら怒って去っていった。

「ないもんはない」と氏は笑って行って、また再びあるきだした。

「鍛冶町1 - 2 - 3」ではこのあたりの人たちが3人買っていき、やがて「鍛冶町1丁目4」付近の『かにの日本海』の前にやってくるが、店のシャッターは閉まっている。ここは「よく買ってくれる」店だといった。しかし、今日はこの通り休みらしいので引き返すことになった。去り際中川原氏は

「あそこが休みなんて珍しい」とつぶやいた。

ひき続き鍛冶町を点々と廻った後、同じ鍛冶町にある、ふぐ料理の店にやってくる。そこでは50代の女性を買っていったのだが、中川原氏はこんなのをもらったとなにやらを私に見せる。何かと思えばよく見てみると百円玉である。しかも黒ず

んでいて、カビも付着している。そんな百円玉を氏は金属やすりでごしごしとこすり始めた。そうするとみるみるうちに汚れが取れきれいになった。その百円玉をおさめ、また歩き始めた。

鍛冶町から、小倉そごうのある京町3丁目、そして京町2丁目へと行くのであるが、京町2丁目へ行く際には小倉駅前の大きな道路を横切らなければならない。そこで、「車」であるリヤカーを引く中川原氏は車道を、そして私はその上にある大きな歩道をおいていくこととなった。

エレベーターに乗って、上にのぼるとすぐにリヤカーが見えそうなところまで走っていく。そしてよく目をこらすと、前方の下のほうに小さくりヤカーが見える。バスや乗用車がひっきりなしに行き交う中にただひたすらゆっくり歩くその姿は、私にはやはり特異に見えたが、それと同時に「力強さ」というものを感じた。

そのあとエレベーターをおりて、中川原氏に合流する。そして京町1丁目・室町2丁目を廻った後、大門2丁目の西小倉駅にやってくる。今日も自転車をここに置いてあるのでここでお別れをする。つぎは12日の木曜日に、ということをや約束し、第4日目の終了である。

<第5日目>

11月12日木曜日。天気は快晴。例によって平松町の『奥野米穀店』で待ち合わせをして、13時半に出発である。中川原氏が言うには、今日いつも行く『丸徳うどん』で14時半に毎日新聞の人と待ち合わせをしているとのこと。それにあわせて進んでいくのだそうだ。

鋳物師3の『ホワイト急便』にて「何かいらんですかー」と声をかけ、13時37分、『第一燃料工業株式会社』にやってくる。その会社の中から30代くらいの女性が出てきたのであるが、外に出てきたのは買うものがあるからではなかった。

その女性が言うには、私が中川原氏と一緒に仕事をしているのを見て、氏が仕事を引退して私が代わりにリヤカーを引くのか気になってでてきたそうだ。

「おじさん元気なのに・・・」

そう付け加える彼女に中川原氏は笑いながら否定したあと、私が一緒に歩いている事情を説明した。すると彼女は安堵し、そして納得してくれた。

「途中でくたびれちゃだめよ」

そう私に言い、彼女はほうきを買っていった。

ここを離れるとき、中川原氏は

「まだまだ若いもんには負けん」

と笑いながらいったが、その表情はどことなく嬉しげでもあった。

それから13時41分に大門2丁目までやってきた。いつもならこのまま室町2丁目にはいり、『丸徳うどん』までいくのだが、待ち合わせ時間にはまだ早い、ということで豎町のほうを廻ることにした。

そうして豎町1丁目を一通り廻るが、あいにく買ってくれる人はいない。またふたたび大門へ向かうこととなった。

大門では、帽子から上着、ズボンまで緑一色の作業服を着た男性が竹箒を二本買っていったほかはお客さんもなく、そのまま室町に入る。

14時8分頃リヤカーを「室町2-6」で止めたあと、『丸徳うどんの』店に入る。毎日新聞の人はまだ来ていなかったが、食べ終えた頃には来るだろうと、とりあえず注文して待っていることにした。

しばらくすると男の人が店に顔をだす。年齢は20代半ばくらいで私とそうは変わらないように見える。どうやらこの人が毎日新聞の人のようだ。中川原氏が聞いたところによると、昼食を済ませたらしく、向こうで待っている、ということだ。

やがて注文のうどんがやってくる。この前と同

様、私は大盛りうどん、中川原氏は普通の量のうどんである。今日もお腹がすいていたので、何の問題もなくうどんを平らげた。うどんを食べている途中、店員さんが中川原氏に

「今日で終わりなんよね。さみしねえ」

と言った。そう、今日は中川原氏と廻る最後の日、よって氏と一緒にここで食べるのも最後なのだ。中川原氏が食べ終わるのを待って、この店を出ようとすると、店員さんは私に、

「今度は普通のお客さんとして食べにきてね」

といってくれた。

14時半ちょうどに店を出て、毎日新聞の人と合流する。取材だと聞いていたが、この人は写真撮影だけをしにきたそうだ。見れば片手にカメラ、もう一方の手に脚立を抱えている。どうやら取材と言うのは、同じ社の別の人がするらしい。そうして私たちは常盤橋のほうまで向かっていった。

「橋の真中をそのままゆっくり進んでください」

そういわれた通り、中川原氏は常盤橋をゆっくり進んでいく。京町に行く際にいつもは横に見える「室町大橋」を渡るのだが、今日はあえてこの橋に行く。おそらくこの古めかしい「常盤橋」と中川原氏本人、そしてリヤカーが見事にマッチし、「絵」になると考えたのだろう。

「そのあたりで止まってください」

と言い、矢頭と言うカメラマンは腹ばいになってパチリパチリと何枚も何枚も撮っていく。微妙に位置をずらしながら、次から次へと。そうしてここでの撮影は終了した。

京町の商店街でも何枚か撮影した後、やがて船頭町に来た。ここにある『井筒屋』でまた撮影をするということだ。

やがて井筒屋の建物と建物にはさまれた、広場のようなところへやってきた。ここにはベンチがいくつかあり、休憩所のようなところだろう。そこで再び撮影が開始された。

「そこをゆっくり往復してください」
言われるがままに、中川原氏は歩き出した。

きらびやかなショーウィンドウの並ぶ井筒屋の建物の間をゆっくりゆっくりと歩いていく。普段こうした場所は歩かないせいもあってか、中川原氏の姿はいつもと違ってどこことなくぎこちない。そんなことはお構いなしに撮影はどんどん進んでいった。

普通に立って何枚か撮ったあと、今度は脚立の上になたて撮っていく。上からパチリ、下からパチリとなかなか忙しそう。そんな中、60代の女性が氏のほうへ寄っていく。なにやら買っていくようだ。待ってましたとばかりにカメラマン。私に荷物を預け、早速その様子を撮影し始めた。

そのあとは別のとおりを行く様子を何枚か撮り、やがて撮影は終了した。

カメラマンが去っていったあとのこと、中川原氏は先ほどお客さんが買っていったことにたいして

「ああいう所で売れるとは思わなかった。どこで売れるか分からんね」と嬉しそうに笑った。

それからいつものように京町2丁目に入り、魚町1丁目、そして道路を横切り鍛冶町へと歩いていく。いくつかの店を廻ったあと、16時頃に「鍛冶1-7-2」にやってくる。『森鷗外旧居』が小倉にあることは前から知っており、近くにきたついでに寄ろうとしたことはあった。しかしその時は結局見つからずそのまま帰ってしまった。その建物が今、目の前にある。人通りのあまりない普通の道の脇に、ひっそりとそれは建っていたのだった。

敷地内に入ってみると、建物の前に一人と、庭の少し奥のほうに一人みえた。そして建物の中へ入ってみると、そこには畳の部屋がいくつかあった。ただそれだけあった。そんなものかと来た道

をまた引き返す。そして中川原氏の姿を探すと、『竜園』という料理店のそばで、その店員らしき女性と一緒に腰をおろしているのをみつけた。何をしているのかと思ひ近寄ると、どうやらその女性が持っていたちりとりが壊れたらしくそれを直しているようだ。そうして応急処置が終わると「ありがとうございます」と言い、その女性は店の中へと入っていった。

そこを後にし、京町・米町を廻った後、場所は小倉駅近くのマクドナルド付近に移る。

50代くらいのこぶとりの男の人が「おい」と手を上げてこちらのほうへやってくる。見ると顔は少々赤っぽく、声もやたらと大きい。そして中川原氏になにやらぶつぶつ言いながら、網焼き用のあみや他に何点かを次々に袋に入れてもらっている。「いくらか」と聞き、氏が値段を言うと声をさらに大きくして、「そんなにするんか。だったら百円ショップで買ったほうがええわ」などと言い、なにやらまたぶつくさ言いながらどこへともなく行ってしまった。

「そんなだったら買ってもらわんほうがええよ」

中川原氏は笑いながらそうこぼしていた。私は全くそのとおりで、とばかりにうなずいた。

それから京町で60代の女性がステンレスたわし、デッキブラシを購入した以外はお客さんもなく、西小倉駅までは少し話をしながらやってきた。ここでどうやらお別れである。

「また頼んだりするかもしれないので、そのときはまたお願いします」

「ええよ」

そんな言葉を二言三言交わしながら私たちは別れた。離れていく姿を後ろで静かに見送ったあと、私もまた自転車置場へとむかっていった。

第三章

この六ヶ月間を振り返って

5月の終わり頃中川原氏とであって、今はもう12月にさしかかろうとしている。私には長いとも短いとも言える期間であるが、なかなか貴重な経験をしてきたように思う。

普段街を歩いていて、何気なく中川原氏を見かけたのであれば「珍しい」とだけ思ってやり過ごしただろうが、卒論の題材を考えめぐっていた時期と重なったおかげか、そのままではおわりはしなかった。氏の商売のことや本人のことをもっと知りたいと思ったのである。そして氏と出会い、話を聞き、一緒に廻る、という経験ができた。

話を聞いてわかったことも多いが、実際に中川原氏と一緒に廻ってみることでわかったことも決して少なくない。お客さんから受け取ってしまったカビのついた百円玉を他のお客さんが受け取っても嫌な気分にならないように、わざわざ綺麗に磨いていたこと。「ここはよく買ってくれる」と常連の店の前に来ると、よく私に教えてくれたこと。これらのことから感じ取れた、中川原氏のお客さんを大切に思う気持ちというものは、一緒に廻ったからこそそのことである。

またその一方では、「私は足が悪いからおじさんのような店が助かる」といってくれるお客さんもいるし、私が中川原氏と歩いているのを見て氏がリヤカー業を退くのではと心配になって、わざわざ会社の外にまで出てくる人までもいた。また氏を昔からよく知っているお客さんなどからの、「すごく感心しているのよ」というような声を何度となく耳にすることもあった。そうしたことから中川原氏もまたお客さんに必要とされ、そして慕われていることが見て取れる。お客さんから思われ氏もまたお客さんを思い、とどちらかの一方通行ではない、とてもいい関係が双方の間に築きあげられている。そんな関係が市の商売を成り立た

せている物の一つではないだろうか。この関係はとてとても大事で、一朝一夕でできるものではない。今までも、そしてこれからもなお増えつづけていこうだろうコンビニでは、そんな関係はとてとても築けそうにない。多くのコンビニでは便利さと引き換えに人間としての温かさを失ったように見えるからだ。バイト店員の「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」の言葉は機械的に冷たく感じる。コンビニだけに限ったことではない。他の店もまた同様である。客との人間らしい付き合いができなくなっている。そんな時代だからこそ中川原氏にリヤカーを引きつづけて欲しいし、そんな商売も増えていって欲しい。

一緒に歩いた5日間を含めた数ヶ月の間も氏の売り歩く姿は、今までそうだったように、ほとんど変わることはなかったが、私の中の氏のイメージは大きく変わっていった。最初見かけてからしばらくの間は、他と変わった存在として珍しいだとか面白いだとか単純にそう思っていただけだが、共に歩いて廻っているうちに、変わっているのは中川原氏のほうではなく、むしろ周囲のほうなのだと思うようになった。今にしてみればあたりまえと言えばあたりまえのことなのだが、最初の頃の私はそんなことも気づいてなかったのである。

変わらないでいること。一見簡単そうではあるが、これが実に難しい。宇宙では数多くの星が誕生するが、その輝きは永遠に続くことはなく、どれもがやがて消滅していく。また地球上では遠い昔から今日までいくつもの国ができていったが、その一方で幾つかの国は滅んでいってしまう。それほど大げさなことではないものの、何人もの同業者が職を変え、街の様子も刻々と変化していく中で、中川原氏は人間としては40年以上もの間、ほとんど変わらぬ姿でリヤカーを引きつづけているのだ。なかなかしようとしてもできないことだ。スポーツ新記録が次々と塗り替えられていくよう

に、CD売り上げのランクがめまぐるしく入れ替わっているように、変わらないでいつづけるのは難しいのである。

何度もいうように、本当に変わらない姿で歩きつづけてきた中川原氏であるが、何事もなくこれまで続けていくことができたのかと言うと、そういうわけでもないようだ。

「やめようと思ったこともある。でも辛抱して乗り切ってきた。」

そうした言葉からは氏にも変化を迫られた時期があったことが伺える。しかし、

「今では健康のためにもずっと続けていきたい」と思えるようになってきた。無論、「健康のため」という気持ちだけではおそらく続かない。戦後しばらくの、店が今よりもずっと少なく、常連客が多かった時期に比べると、売り上げもかなり落ち、売り上げは二万、利益にして四~五千円ならばいいほうだ。昔はそれこそ生計を立てるための仕事だったが、現在は多くを年金に頼らざるを得ない。そういった状況に今は直面しているのだ。

金銭的な問題だけではない。私のことをお客さんが「お弟子さん」すなわち後継者かと冗談半分本気半分で言ってきて、中川原氏が笑いながら否く。

定する、という場面に幾度となく遭遇したが、やはり後継者とも言わずとも同業者ができる嬉しいのではないだろうか。とはいうものの、

「固定客がいるからやっていける。今はじめても商売が成り立たない。」

という言葉からも分かるように、リヤカー業の今後の状況もきわめて困難だといえる。今は始めるには時代が遅すぎるようだ。

しかしながら、そうした状況にいながらも、中川原氏はそこらにいる人よりもずっと生き生きと見えるし、前述の言葉にしても裏返せば、氏自身の「買ってくれるお客さんがいる限り売り続ける」という気持ちの表れでもあるといえる。その気持ちと、

「今は外国製品が多くて安いからつまらん。日本製品は値段がその3倍もするが、持ちがよく、質も良いから、分かるお客さんは買ってくれる」という言葉から見て取れる商品への思い入れ。そんな思いが重なり、原動力となって、中川原氏は今日もまた小倉の街を歩いていく。